

# 生き残った者として

岸 本 栄 子

東中野三丁目

八月六日、目の前が強烈なオレンジ色になり、つぶてのようなものが体中にぶつかり、物凄い風圧で体がキリキリ舞いをさせられる。と次の瞬間、熾のぼり町の家の下敷きになっていた。

最初に這はいた母に辛うじて引きずり出してもらった。そして今度は、地の底からオーイと呼ぶ父の声に気づいて、母と二人必死に救出した。地上に出た父は背骨をひどく打つたとみえ、歩くのはおろか、立っている事すらも叶かなわぬ状態であった。あたり見渡す限り家はつぶれ、ヒロシマの街はすでに無くなっていた。

ところどころに置いてあつた大きなコンクリートの防火用水が、昨夜まで満たされていたはずなのに、カラカラに乾いていた……それを本当に不思議な思いで見た事を昨日のように思い起こす。

そのうちボロボロの薄着をまとつた人々が——昨夜からの空襲、警戒警報両方とも解除された直後の出来事として、暑い夏の朝、皆ホッと防火服を脱ぎ捨てて、軽装になつたばかりなのだ

——挨拶を交わすわけでもなく、ゾロゾロとあちこちから這い出て、無表情に、ただ本能的に市外へ出る道を歩いて行く。

母が父をひきずるようにして皆の後からついて逃げながら、非常の際に行くべき所を常から打ち合わせてあつたので、そこへ「あなただけ先に行くように」と言つたので、スリッパにブラウス、はだしのまま、一人で後ろの両親の事を気にしながら歩いて行つた。

途中、くずれた家の下敷きになつた人の、白い靴をはいた両足だけがバタバタしていたのが、今だに目の底にちらついている。

当時十六歳だつた私には何をすることも出来ず、ただあちこちから吹き出る血、特に右の眼の下の傷が痛むのを他に何もないので、ブラウスのあちこちで拭いながら歩いた。町はずれの饒津神社付近の鉄道の枕木が方々で燃えていた。

その線路を通つて少し行つた所で、小学校の校長先生にお会いした。先生は私を見て、オーッと一言、そのまま人々とは逆

に市内へ入って行かれた。責任上、学校の事を見にいらして、そしてその後間もなく原爆症で亡くなられたと伝え聞いた。

思い出せば、まだまだ際限もなく、どの被爆者の方も煮えたる怒りとともに当時の出来事を胸に秘めておられる事だろう。

私の父もその後、昭和二十九年二月、長く苦しい闘病生活の果て、再生不良貧血で、赤血球、白血球、血小板、すべてゼロになって死んだ。まだ医療費の補助など、何の手も打たれていなかった頃なので、一家の働き手である父の間の生活の苦闘はみな母一人で背負っていた。

だからその後（ビキニ水爆実験で被災した）福竜丸の久保山さんの補償問題などのニュースを複雑な思いで見たり、聞いたりしたものだ。

東友会（東京都原爆被害者団体協議会）の被爆二十五周年の墓参団に運良く参加させて戴くことになって、これまで残された者として、なすべきだった何事もしないで過ごして来た事への贖罪の思いと、懐かしさでいっぱいになりながら、東京駅に参集、報道陣のカメラや、見送りの方々に送られて広島へ出発した。

岡山あたりから、夜がしらじらと明け初め、尾道、糸崎等々のなつかしい駅名、夏の朝のボーッとかすんだあたりを、汽車の窓からジーンと万感こもごもの思いで眺めていた。

各被爆者団体の方々の出迎えを受けて、早朝二十五年ぶりに

広島のをこの足で踏んだ。宿舎へ向うバスの中でも目をこらして町並みを眺めた。無い……私の胸の中に二十五年抱き続けて来た広島姿が無い。変わらないのは、聞くだになつかしい二葉山など三方の山並みと女学校時代の友だけであった。卒業以来の長い空白の年月、そんなこだわりの少しも感じられぬ再会だった。

皆様のおかげで心暖まる有意義な旅をさせて戴いた。色々と忙しいスケジュールの中で、平和公園での慰霊祭が行なわれた。昔、通学の折々に横を通っていた原爆ドームの焼けただけ残飯、川をへだてた現在の公園には民家が密集していたのだ、などと思いながら、学徒動員犠牲者の塔に刻まれた各学校名、特に母校広島市女という文字をみつけた時には、溢れる涙を禁じる事が出来なかった。

同行の方から、幼い息子さんの手をひきながら、毎日毎日ドーム付近へ御主人を捜しにこられたが、遂に再び相まみえる事が出来なかったというお話を聞かせて頂いた。平和公園の程に位置する慰霊碑というか、墓碑銘というか、その前で東友会の長尾さんの読み上げられた慰霊文のお声がいまだに忘れることが出来ない。

原爆病院へお見舞いに伺い、色々な病状で入院されている方々のお姿を拝見して、胸がつぶれる思いだった。病院の玄関の所に置かれた、どなたの作品ともわからないけれど、ケースの中

に、丹念に祈り、集められた万羽鶴、それが被害者一同の声を  
一挙に叫び上げるような気がして眺めていた。

スケジュールの合間に母校同窓会の経営している千田保育園  
をおとずれ、昔とちつとも変わらない数人の方とお会い出来た。  
その折に名簿を頂戴して、当時の一年生二七四名、二年生二六  
三名、印刷された死者数の文字を、呆然と眺めつづけ、何処に  
何をぶつつけたら良いのかわからなくなってしまうた。

兎に角、感激……涙……の旅をさせて頂いた。現在もただあ  
りがたく、一生の思い出として胸の中で生き続けるでしょう。

人間として生きる悩みに苦しみ続けたこの数年、早く自分を取  
り戻し、細々ながら長広会のお手伝いをしたい……励まし続け  
て下さった数々の友人に深く感謝している。

ある本の中でちよつと心ひかれる文章だったので書き留めて  
おいたものに、

「人の世におそいかかる運命の波は、時には冷酷無残な荒波で  
あるけれど、やわらかい春の日ざしに打ち寄せる温かい波であ  
る事もある。広い海に漂う木の葉のようなものが人の命とする  
ならば、荒波におそわれるのも、温い波につつまれるのも、す  
べて運である」とある。

しかし被爆したのも、難病にかかったのも運であるなどとは、  
どうして達観できよう。私自身もつと強く、明るく、残された  
半生を生き残ったものとして悔いのないものになりたいと思う。

(遺稿 一九九三年(平成五年)没。多発性骨髄腫瘍、享年六  
三歳)

